

<原典と解題>

翻訳論—原典と解題(二)

「解釋と翻譯」

長沼美香子

(立教大学)

この小論は、日本における翻訳論(有名無名を問わず)に光をあてることを目的とした研究ノートの二回目である。先回は、堺利彦「翻譯に就いて」を取りあげた。今回は、明治末期から大正期にかけて博文館より刊行されていた月刊誌『英語世界』の「解釋と翻譯」特集号(一九〇九年四月十五日)に焦点を合わせる。

原典テキストである当該『英語世界』誌の「目次」と「増刊発行の辞」に続いて、数編の論考を抄録し、次に解題を付す¹。

【原典テキスト】

『英語世界』第三巻第五号(春期増刊) 博文館、一九〇九(明治四十二年)

目次²

解釈と翻譯(増刊発行の辞)

訳解と英作文／武信由太郎 解釈に就て／高島捨太 訳解三則／増田藤之助 小生の翻譯法／馬場狐蝶 翻譯壇に望む／深澤由次郎 翻譯の苦心／小日向定次郎 訳読と翻譯に就て／菅野徳助 解釈と修辭学／横地良吉 翻譯と直読直解／村田祐治 翻譯と文法形式／岡倉由三郎 英語の理解と其訳読／岸本能武太 英語解釈の心得／喜安璣太郎 聖書の邦訳／高橋五郎 解釈力と翻譯／内田魯庵 英文和訳所見／今井信之 訳解の栞／長井氏晷

(佳訳評釈)米國獨立之檄(故福澤諭吉訳)／増田藤之助 西國立志論(故中村正直訳)／深澤由次郎 斯氏教育論(故尺振八訳)／長井氏晷 墳上哀詩(故矢田部良吉訳)／長井氏晷 小公子(故若松賤子訳)／S.K.生 品性論(故中村正直訳)／長井氏晷

現代名家の翻譯振

訳読に対する諸家の意見

大懸賞英米名家署名筆蹟判読

解釈と翻譯(増刊発行の辞)

英語研究の第一目的 英語を活用する用途は色々有らうが其研究の目的は(1)理解と(2)運用との二つに過ぎぬ。そして此二つの目的に輕重高下を付けることは素より出来ぬが最多数の最大目的は適用よりも理解に在る、ゲーテが「一外国を曉得するは一新世界を發見するなり」と道破した外語研究の利益は運用よりも理解に於て最も手近に得られる。

英語解釈の二方面 理解は即ち解釈である。解釈の方面は(1)外人の口に上るものを耳で理解するのと(2)印刷又は筆記されたるものを目で理解するのとの二つに分けられる。前者は所謂「聴取」で後者は普通に云ふ「講読」「訳解」である。此二方面にも矢張輕重は付けられぬが英語を利用する巾さから見ると後者の目に倚る理解の方が遙に広い。

解釈力の養成 既に英語研究の第一目的が理解に在つて、其利用範囲が読書に在るとすると解釈力の養成と云ふことが英語研究上の主要な部分を占め、読書力を充分に養成すれば英語研究の大半の目的が先づ達せられたとも云へる。で吾人は本誌の第一増刊に於て先づ此解釈法の諸問題を攻究したのである。

解釈と翻譯 解釈は云はゞ一人のものである、正解した物を公衆に頒たうとすると茲に翻譯が必要となる、翻譯は一の技術で此巧拙は臆て Translators, traitor (翻譯者は叛逆者也)となる、吾人は茲に如何に翻譯すべきかを究むる所以である。篇中に評釈した訳例は現時の邦文に比し多少時代物の嫌はあるが忠実なる正訳として研究すべき価値ありと信ずる。

一人前の英語 解釈と邦訳とは英語研究の一部分で全部ではない、運用の諸方面を究め両々相倚り相助けて始めて一人前の英語となるのであるが是等の攻究は他日に譲ることとした。

翻譯の苦心

小日向定次郎

訳家の苦心 翻譯と言ふことに就ては一勿論英文和訳の意味ですが一余り多くの經驗を有たない小生に、固より定まつた考などある筈もない。まして翻譯の方法とか順序とか段取とか言ふことになつては、尚更言ひ難い。然し小生も英語の教師であるから、教室で英語を教ふる時分に此語はどう言ふ訳が適当だらうか、此句は斯う言ふ風に生徒の頭に入れたら、応用がきくだらう、此章は斯う呑み込まれたら、読書力を養ふ上にも、又英語に対する興味を起させる為にも、なるだらうと、種々頭を捻つて見る。此処が所謂翻譯者の苦心であるとするれば、小生も翻譯家の苦心を嘗めつゝあるのである。[...]

直訳の弊 現今では直訳体の訳し方は、全然廢れた。後戻りに文字を拾つて、読まない様な癖をつける為に、いろいろ工夫して、頭から讀下して行くやうな訳をする。是も翻譯家の苦心の一つに数へられる。我国の英語の是まで發達が鈍かつたのは、直訳体の訳を付けた弊ではあるまいか、丁度漢文に返り点を付けて、読み習はせたものだから、現今に其癖が取れないので、日本流に漢文は読めても、支那人の言葉を聞いては、薩張解らないと同様の弊だと言ふ人がある。尤のことゝ思ふ。

頭から読み下す訳 なるべく頭から讀こなす為め、翻譯者の苦心と認めたものを、一つ二つ例

を挙ぐると、

Not a star but shines too bright.

此句の内の not a...but ですが、尋常に too bright に輝かぬ星は一つもないでも勿論意味は明かであるし、又和訳するとき、そう訳した方が味があることがあるから、一概には言へないが、此 not a...but を every 位に見て置いたら、即ち not a といふ語が現はれると、後に but が大抵来るものとの、考が得られて、直に every star と読んで、but を飛ばして、shines と続けるやうにする、上の例は短かいからよい様なものゝ、次に示すやうな文章であつたら、後戻をやつて居ては、一文章読むにそれこそ日が暮れて仕舞ふ。

Not a latent echo in the house, not a squeak and scuffle from the mice behind the paneling, not a drip from the half-thawed water-spout in the dull gard behind, not a sigh among the leafless boughs of one despondent popular, not the idle swinging of an empty storehouse-door, no, not a clicking in the fire, but fell upon the heart of Scrooge with softening influence, and gave a freer passage to his tears.

此の様な文章の時は、not a...but を先に言へるごとく every と覚えて居たら、早解りがする。早解りがすれば、能く文章が味へて興味が湧くのである。[...]

慣用的の訳例 或は又 as...as ever といふ語で繋がれた文に、能く出合ふ。此なども今までの孰れにも劣らぬといふ意であるから。古今に稀なとか或は尚軽くとれば尤もの義で通ずる例へば

There sleeps as true an Osmanlie,
As e'er at Mecca bent the knee;
此処にメツカの神殿を跪き拜せる
従来何人にも劣らぬ土耳其人眠れり
(葬られて)

是を古今稀なるマホメット教の信仰厚き土耳其人と頭から訳して仕舞ふ。

He was as honest, energetic and true-hearted a man as ever lived.

彼男は世に稀しい正直な、元気の旺盛な真率な人でした。

となる世に稀らしいで as...as ever が現はされてる。此様な場合には尚碎いてそりや稀らしいとした方が宜い位である。

その他

We never meet but we quarrel.

出合ひさへすりア喧嘩だ。

never but 何々すりや何々すると覚えてかゝれば meet で逢へばと訳して、quarrel で喧嘩だと解するが如き、

It was not till he advised me that I became aware of my fault.

彼の男の忠告を受けて、始めて自分の間違いを知った。

It was not till...that を何々して...始めてと覚えてると、極めて簡単に分るがごとき、尚斯う言ふ例が多い。以上のことは、小生が始めて知つたのではない。そう言う風に訳すがよいと、先輩が教へて置いて呉れたことだ。[...]

訳読と翻譯

菅野徳助

英語研究と訳読 近頃英語教授法の問題が大分八釜しくなつて、訳読教授法が迫害を受けて居る様で、中には訳解は国語教師の領分であつて英語教師の為すべき事でないとか、訳解は外国語を学ぶに不自然の方法だから全然廃棄せねばならぬと云ふ様な事を聞くが、之は恐く折に触れての放言であつて、真面目に斯る事を主張する人はあるまいと思ふ。若し訳解が日本人の英語教師の為すべき事でないなら、発音会話作文は尚更日本人の教ふべき事でないとも云へる。又英米人が英語を習得するには勿論訳解など云ふものに助けを藉るに及ばないが、我々は特殊の邦語を有する日本人で、而かも日本にありて英語を学ぶのである、して如何に英語の研究が盛になつても多くは中学時代で之を学び初めるのである。之れで、我々は英語を習得するに元来不自然の位地にあるのだから、自然法一点張では実際に適用が出来ない。余は矢張外国語を学ぶに当ては、或る程度迄邦語の媒介を藉る方が捷徑で利益が多い、換言すれば訳解も他の方法と相俟つて最も有効な外国語研究の仕方であると思ふのである。

訳解は全部でない 併し訳解なるものは英語を学ぶ方法の全体でなければ、訳解し得ると云ふ事丈が英語研究の目的でもない。漢文を学ぶ様に訓点で以て訳読しては少くとも *living language* を習得する適當の方法でない。此方法のみに頼る習慣がつくと、一度訳読せざれば原書の意義が心に写らない様になつて何時迄も間接に英語を読んで居る事になる。それで、此方法は一時の方便である。手引である、媒介であると云ふ事を忘れてはならぬ。吾人は邦語の媒介によりて原語の意義を概ね解し得た時に、初て直接に英語に親しみ、之に習熟する機会を得たのである。が多くの学生は英書を学ぶに当り訳読し得たるを以て足れりとし、更に進んで其原文を原文の儘に読んで反覆之れに習熟し其印象を得ることを怠る傾向があるから、英書を読んでも其感想は邦語に訳せられて頭に残り、従つて原語に親しむ大切な機会を失ひ、英語の精神に徹底して之を活用することが出来ない。恰も切符を買つても汽車に乗らざれば旅行の目的が達せられないと同じ事で之れは訳読其もの之弊にあらざして、訳読で得たる機会を利用せざる弊、換言すれば訳読の目的を無視するの弊である。

読書と会話作文 世間では口癖の様に英書を読むは易いが会話作文は六しいと云ふ。成程我邦にあつては作文会話を實地に練習する機会が少いから比較的困難に相違ないが、読書も之れ程に容易なものでない。余は英作文を教ふるに当り学生の作文によりて彼等が極めて粗雑に英書を読みつゝあることを切に感ずる。和訳字書の訳字を無意義に排列して直訳したり、助働詞や接続語の意義を無視する所謂豪傑読みならば兎に角、原文の感想を明瞭に精確に解説するに大なる練習と研究とを積みねばならぬ、且つ英書を読み得ることは、我学生の多数に取りて英語研究上より生ずる最大の利益であり、又作文談話の熟達も其一半は読書より来るのであるから読書力を養ふことを輕蔑してはならない。

読書力を養ふには練習と研究の二方向に力を用ゐねばならぬ。

読書のさまざま 前にも述べた通り一通り訳読によりて意義を解したる時は直ちに英語其もの

を解し得るまで反覆之を熟読しなければならぬ、或は友人と相会して一人が音読し一人が之を聞き居りて日本語に口訳するも有益な方法である。又成べく容易なる書物を取り難解の語に遇ふことも大体の意味を解し得る限りは字引の厄介にならず多く読むことを努むるがよい。此場合には出来る丈訳読的態度を取らず、原文を音読して之に習熟するが目的である。

併し此方法にのみに依る時は、卑近なる英語研究の目的は達し得んも、精確高尚なる語学の智識を得ることは望み難い。習熟を以て唯一の方法とする我々の邦語の智識は極めて浅薄散漫なものである。邦人にして多年英米にありし人の間に、会話も作文も読書も自由なれども其英語の智識は甚た不精確なる人もある。且つ卑近容易なものにのみ慣れると、知らず々々の間に一種の惰性を養ひて、難解高尚なものを嫌忌し、研究的精神、学問上の高上心を失ふに至ることがある。深遠高尚なる思想は多くは難解の文に収られて居る、読むに価ひする書籍は大抵読むに難い書籍である。卑近なる目的を以て英語を学ぶ人は兎に角、高尚なる語学の目的を達せんとする人は精励刻苦種々なる困難に打勝つべき気力と忍耐がなくてはならぬ。[...]

翻訳 翻訳の問題に至りては語学以上の問題である。達意文の翻訳ならば語学に通じて相当の邦文を綴り得る人が練習を積まば出来る事である、併し文学的の翻訳は語学者であつて且文人を兼ねたる人の手に成らねばならぬ、且つ原著者の精神感情を呑み込んで訳者の気合ひ文体が原著者のそれに投合したものでなければならぬから、其仕事の引立たぬにも拘らず文章上非常な困難な事業であつて古来翻訳の完全なものは甚だ少ない。此頃或る文士は翻訳の議論をして、it とか that とか云ふ事は神田辺の英語屋の仕事だと云ふやうな事を云つたさうだが、文士としては如何に偉らいにしても、翻訳の事業は創作とは違つて矢張一半は語学者の仕事であるから、之れは翻訳家としての適当な態度ではあるまい。且つ翻訳に最も大切なのは原著に対する同情、尊敬、忠実の念である。原文よりも善く書いてやらうとか、又は原文にない贅句を挿んで訳者の文才を振廻はさうとする様な考は大禁物である、自家の腕を見せたければ創作で見せるが適當である。[...]

翻訳と文法形式

岡倉由三郎

翻訳は困難也 [...] 翻訳は Art 即ち一の技術である。で何程英語に達して居ても日本語を能く知つて居らんと出来ません。つまり英語にも日本語にも熟達して居るといふのが必要である。

翻訳をするには先づ第一に原文の意味が十分に了解せられねばならぬ。次には其の分つた意味を日本文に表はす可き用語即ち雅語を以てすべきか、或は俗語が適當であるかに注意を払はねばならない。そして最後には、調子即ち真面目のものか或は洒落の如きものかを吟味せねばならぬと思ふ。[...]

中学校の翻訳 翻訳の困難はこの通りである。さればこの困難な翻訳を中学校に望むは無理であると私は思ふ。恰も徒弟学校の生徒に美術品の製作を望み、小学校の生徒の習字に書家の達筆を望むと同じく不当な注文と思ふ。然らば中学の翻訳は如何に取扱つたら宜いかと

云へば、私の考では、原文の意味が分るか何うかと云ふ位の所で宜いと思ふ。[...]

馬場氏と内田氏 馬場狐蝶氏と内田魯庵氏とが訳文批評の態度に就て先頃論戦が有つたが、私は馬場氏の説に賛成する。内田氏の意見では、訳文を批評するには一字一句の末迄を是非論難すべきものではない。其様なことは所謂文法学者のやり方で、苟も泰西の大文学を我文壇に紹介しやうといふ文士の為すべきことでない。一字一句の誤訳位は深く詮議立てをする必要はない。と云ふやうに聞ゆるが、私は仮令一字でも一句でも誤訳があつては不可と思ふ。原文の意を写す為に多少形式を変へることは善いが、誤訳は断じて不可と思ふ。此点に於て私は馬場氏の説に賛成する。[...]

英語の理解とその訳読

岸本能武太

[...]訳読時代の反動か今日では「實際英語」の方が比較的に重んぜられて居る。少なくとも重んぜられんとする傾向があるやうだが、果してこれは喜ぶ可き傾向であらうか。

僕の考へでは、中等学校で英語を教ふる目的は、畢竟読書力の養成にあると思ふ、否、あるべきものと思ふ。十万二十万と云ふ男女学生を通辯に仕立てる必要は無い。そは彼等の大多数は一生涯西洋人に接して之れと言語を交ふる機会を有たぬものであらう。此等の学生に「實際英語」を中心として英語を教ふるは甚だ馬鹿らしいことで、時間と労力とに對し其の報酬は甚だ輕少である。其れよりも彼等に英書を読む力を与へて置けば、自ら考へが広くなり、世界の大勢に通じ、日進月歩の新思想に接するを得、甚だ有益であらうと思ふ。[...]

僕の考へでは、中等教育に於ける英語教授の目的は英語の理解(Understanding)に在るので、英語の訳読(Translation)に在るのでは無い。言ひ換ふれば英語を解するのが目的で、英語を訳するが目的ではない。既に英語を解すれば訳は自然に出来る筈であるが、然し極端に云へば、訳は出来ないでも意味さえ分れば、それで事は足るのである。手短かに云へば、訳読は一時的のもので、早晚不用になる可き筈のものである。いつ迄も訳せねば意味が分らぬやうでは、本当に英語を解するとは云はれない。

英語は英語で読むから其の妙味があるので、訳して読んでは其の味の半分は無くなるのである。成程思想斗りは訳しても分るが、斯くするは恰も植物学者が桜の花を砕いて弁だとか葢だとか云ふのと同じで、到底花の美を全体に賞玩することは出来ない。音に訳せぬでも意味が分ると云ふ斗りでなく、今一層進んで、訳しては何うも意味が分らぬと云ふ境域に達せねば、決して満足とは云はれない。これ僕が訳読を一時的のもの、方便的のもの、若しくは過渡的のものとして云ふ所以である。[...]

或る人々は、特に西洋の教師は、訳読に依らないで始めから丸で英語で教へやうとするが、僕は之れに反対の意見を持つて居るものゝ一人である。幼少な小供なら知らぬこと、既に中学時代の学童に外国語として英語を教ふるに當つては、特に始めの内は日本語を用ひ説明する方が確かに早道で効果が多いのである。教授法が悪るければ仕方がないが、上手にやれば訳読を用ひて教る方が学生の進歩は非常に速い。既に中学時代の学童と云へば、脳髓は

余程発達して理屈が分る様になつて居るから、邦語を用ひて色々な説明をするが非常に便利であるは云ふに及ばぬことである。[...]

或る人は直訳を絶対的に悪いものであるかの様にケナスが、僕はさうは思はない。外国語を読むに際して、凡べての字を残さず日本語に直して読みたいと思ふは、人心の自然の要求であつて、所謂直訳なるものはこの自然の要求の結果に外ならないから、啻にこの要求を満足させると云ふことのみから考へて必要成るのみならず、一字一句訳を引き当てゝ読むことは、文典や作文の上にも、一方に害があると共に又一方に余程利益のあることであるから、一概に悪むといは云はれない。[...]

英語訓読及翻訳に対する諸家の意見

明治の初年に横行したる杜撰極る直訳独案内の怪しげなるに対し、心ある識者の其弊を矯めんとした者は数多く有つた、中にも特に注意すべきは雑誌として「日本英学新誌」「英学」杯を数へ述作として故外山博士、坪内博士、岡倉教授、辰巳小二郎氏杯を数へる、今日訳読の進歩は直接間接是等の諸説に負ふ所多く吾人は今日之を回想するの徒事ならぬを信じ茲に是等の諸家の意見の一般を紹介することにした。

.....

辰巳小二郎氏の訓読法

氏は明治廿四年頃「訓点英語読本」を著はし其緒言の一節に「余が本書を著はしたる所以は正則的語学の進歩を助成せんと欲するに在り。世人の英書を訳読する、少しも英人述意の次第、日本語学の法則を顧みず、故に“何々が何々する事の其事が何々なり”、“何々が何々する事ほど左様に何々が何々なり”など云ふ怪しき訳解を下だす此様の訳解は英人が先に述べたる意を後にし、後に述べたる意を先にす顛倒も亦甚し。英語の正則研究之が為め妨害を受くること尠少ならざるべし。日本語学の法則を顧みざればこそ、憲法文面に“天皇の名に於て”、“立法の権を行ふ”などと云ふ文句を見るなれ。“天皇の名に於て”は“名を天皇に藉る”と云ふに紛らはし、“天皇に代りて”と云ひたし。“立法の権を行ふ”は“立法の力を行ふ”と言ふに均しかるべし、力は有すとか用ふとか云ふべく行ふとは言ふべからず...」と。而して氏が本書に用ゐた符号は(1) 1, 2, 3,等にて訳読の順序を示めし、(2) >にて相連れる二個以上の語が次第に右より左へ読み返るを示し、(3) — は二個以上の語が離る可らざるを示めし、(4) * は数個の語を介して相離れたる二語が一熟語をなすを示した。例へば

(1) I will² soon return.¹

余は 可し 速やかに 返る

(2) I will > walk.

余は 可し 歩行す

(3) It-is-true-that Alexander was > highly-talented.

実に 歴山は なり 高 材

(4) Fuji-san is² so* high¹ that* its top is² always covered¹ > with > snow.

富士山は なり 高山 故に 其 頂は 有る 常に 蔽はれて 以て 雪を

.....

岡倉由三郎氏の訳解意見

明治二十七年の頃岡倉教授が教育時論に掲げた外国語教授新論の中に曰ふ「我等原文を読むも之が真意を悟る所外人と同じからず又同じかる能はざるは彼我風俗人情等大に異なるより随つて語句に由て起こす連想到底同様なり難ければなり、かゝれば我等にして原文の真趣を成るべく解釈するの道これを読みて起こす連想を成るべく彼等外人のに近づかすに如かず、連想近似を来すには種々方便あるべしと雖も就中訳解の如き最も有力なるべき勿論の事なり、訳解を授くるには(一)一語としての訳解(二)一語句としての訳解、(三)一文章としての訳解を施すべし。purple を何時も紫色と訳し to take place を「場所を取る」とし to have to go を「行くべく持つ」と訳し、“To my great joy, an opportunity presented itself for my farther success”を「私の大なる喜びにまで一の機会が私のより遙なる成功に向つて其れ自身を願はせし」と訳する如き直訳は利なくして害多し。其弊害を数ふれば(一)訳語の意のある所を知り難からしめ単に之を暗記せんとする傾を生ず(二)原文の意のある所を知ること能はず、僅に得る所の意義も朦朧として明瞭なる能はず、(三)如何なる平易の原文と雖も直読一下して直に其の意を知るの力を減じ必ず直訳を施すに非れば文意に通ずる能はず、(四)原文の意を酌み違ふ(五)一語一語返り読みする習慣を養ひ為に朗読又は説話を聞き取るの力を失ふ等なり。直訳を廃せば各語の意を知り難しとの批難あらんかそは字典に就き之を求むべく或は別に単語篇を用ゆべし、語は其意義場合により定まるものなれば常に之に同一様の訳語を施さんとするは甚しき誤謬なり」と。

.....

坪内博士の訓読意見

明治二十八年頃の早稲田文科講義録で坪内博士は従来の不妥拙陋なる直訳法を全廃し語を訓ずると同時に多少原文の風趣を伝ふべきを主張した。博士の考ふる所によれば、「今日英文を読み習はんとする者」不便二あり英和字彙の尚未だ不完全なると従来行はるゝ訳読のいとほしいまゝなるとなり。其のかみ行はれし薩摩字書などいへるに比ぶれば今日行はるゝ英和字典の優れること数等なれど語法宜しきを得ざるもの尚あまたあり。例へば専門にのみ用ふる語にして已に特殊なる名称の定まりたるに孟浪杜撰なる訳語を填し間々読者をして一物を二物かと疑はしむることあり。且薩摩字書以来の因襲に従ひ甚しき俗語をもこちたき漢語をも殆どわいだめなく訳語としてまじへ用ゐたれば国文を読む心もて英和字書を見るときは働詞を形容詞と誤まり意義殆どなき接続詞にも深き意義あるやうに思ひ誤ることあり。例へば that といふ語は接続詞として用ふる時は概して国文の「と」といふ語(又は「を」といふ語)に相

当するのみなるを字典には「何々する事」と訳したる故、初学者は此の語に必しも「事」といふ義伴へるやうに心得、“He said that he would not go.”といふ文章を訓ずるや、よしや逐語訳にものすとも「彼れはいへり彼は行くまじと」など言はゞ足るべきを「彼れは彼れが行かぬであらうことをいひし」のやうに訓ずる故所謂訳読に慣れぬ者は自から訓じながら何の意とも解しかぬるなり。又英語の代名詞はくさぐさにて非情有情の別あり男女の別有り又主位賓位領位などいふ位置の格あり。男性の代名詞は *he, his* 等にして、女性の代名詞は *she, her* 等なり。辞典之れを訳して男性は「彼れは」「彼れの」など、女性は「彼の女は」「彼の女の」など管々しく物せりこれ又訓を冗漫ならしめし一因なり。国文の代名詞もくさぐさなれど「彼」といふに男女の別なければ男をも女をも「彼れ」と称すべく、又そがもてる物を指さんに必しも「彼れの帽」「彼女の帯」と言はずともあるべく皆おしなべて「其の」若しくは「そが」などいはゞ足るべくや。多くはかゝる代名詞さへ省かれても至当なるが如し。例へば今の直訳法によれば「彼れ帽をとりて起ちぬ」いはゞ足らんを「彼れは彼れの帽をとり而して起ちあがりし」と訓むなり冗長の至ならずや。さて又所謂訳読法の不都合は字典の杜撰依りも甚し。例へば *I*(余)を「わたくし」と俗訓しながら *you*(爾)を「なんぢ」と雅に訓じて「わたくしはなんぢを愛する」などいふ不等の訓を成し若しくは接続詞の *and* をいつも同じに「ソウシテ」または「而して」と訓じて「蟻と蛛」又は「蟻と蛛と」とあるべきを「蟻とソウシテ蛛」と訓み「廉且正なる」若しくは「廉正なる」と訓じて妥当ならんを「廉直なる而して公正なる」とやうに冗長なる熟語を繋ぎ合せて訓むなどはいふも更なり「足下がそを知らざりしは不思議なり」といはゞ足るべきを「汝がそれを知りなさざりしことのそのことが不思議である」と読むなど笑ふべきよりは寧ろ我国文を害ふものをして憂ふべきなり」と。

.....

故外山博士の翻訳意見

故外山博士は明治三十年「英語教授法」と云ふを著はされた、其中から故博士の翻訳に対する意見を紹介しやう、曰く世間には往々直訳を排斥して意識を主張する者あり。其の唱ふる所は一通り尤もの様に聞ゆれど実は誤解の甚しきものなり。彼等が直訳と称する者は。一種化物(バケモノ)的の訳法のことなり、真の直訳にあらず。真正の直訳は決して排斥すべきものにあらず。*He went to sleep* を「渠は眠りにまで行きし」と訳するは直訳でも何んでもない、一種の怪訳なり、誤訳なり、愚訳なり。*went* を何処でも「行きし」と訳し、*to* を何処でも「マデ」とか「ベク」とか訳するのが直訳なりと思ふは大なる誤解なり。*He went to sleep* の直訳は「あの人は眠りに就きました」と云ふ如き訳なり、決して排斥すべきものにあらざるなり。然れ共真正の直訳を為さんことは頗る考慮を要す、多年の経験を要す。意識は原文の妙味にも構はず、唯々、原文の意味を訳出するの趣向なる故に極めて容易の訳法なり、故に之を主張するの徒世間に虧からず。[...]

【解題】

明治末から大正にかけての月刊誌『英語世界』は、その第三巻第五号（春期増刊、一九〇九年四月十五日）を「解釋と翻譯」という特集号として刊行している。目次を眺めただけでも、有力な英語教育者や翻訳者の多様な論考をバランスよく集めた誌面構成となっていることがわかる。また、目次の次頁には「明治翻譯壇の四名家」として、福澤諭吉、中村正直、矢田部良吉、若松賤子の肖像写真を掲載しており、当時の規範的な翻訳者像も窺える。

まず、本誌そのものについて概観しておこう³。ここで紹介する『英語世界』誌の創刊は、一九〇七（明治四十）年四月十五日であり、その「発刊の辞」には、「中学程度の学校に於ける英語の修習は高等の学校に於けるよりも数倍緊要なるを以てなり而して従来現存せる此種の雑誌は夫々長所なきにあらざるも英学余習の一手段としては大体に於て決して満足なるものに非ざるを以てなり、…」と記されている⁴。藤井（一九八二／一九三三、五八～六一頁）によると、「本誌が創刊された当時の発行部数は現在の大量制とは異なり、どんな雑誌でも万を超えるものは殆んど無かつたのに「英語世界」の創刊号は遥かに万を超えたが其後は辛うじて万に近く踏当まる位であつた」という。また同書は、『英語青年』の主幹であつた喜安璣太郎（片々子）の述懐として次を引用しながら、創刊の経緯を説明している。

この雑誌は本社〔英語青年社〕と深い関係があつたのである。博文館より英語雑誌を出すから主宰してくれと武信主筆に申して来たのは明治三十九年の暮であつた。それから片々子は武信主筆といろいろ案を立て、其一号を出したのは明治四十年の四月であつた。初号は全く片々子が編集したものであつた。長井氏最氏が四月に上京して其二号から編集することとなり大正二年の末まで其の任に当り我社同人が之を助けていたのであつた。

実物で確認してみると、確かに次号である第一巻第二号からは、主幹を武信由太郎（早稲田大学講師）と明記しているが、創刊号には主幹の記載がない。その後一九一三（大正二）年に編集者（主筆）が長井氏最から市川又彦になり、執筆者も入れ替わっている。本誌『英語世界』は十二年継続した後、一九一八（大正七）年の第十二巻第十四号で廃刊となった。最終号における「廃刊の辞」では、「親愛なる愛読者諸君よ。今日まで諸君の良師良友であつた本誌は遺憾ながら本号限りで廃刊することになりました。如何にも唐突なことで、永年御同情にあづかつた寄稿家並に愛読者諸君に対し申訳ありません。…かゝる歴史ある本誌を突然廃刊するのは諸君にとつても、記者にとつても洵に名残惜しい次第ですが、本館は更に多方面に於いて大努力を為さねばならぬ都合上、遺憾ながら之を断行したのです」とあり、廃刊に至った特段の理由は述べられていない。

さて、原典として「解釋と翻譯」特集号からここに収録した、小日向定次郎「翻譯の苦心」、菅野徳助「訳読と翻譯」、岡倉由三郎「翻譯と文法形式」、岸本能武太「英語の理解とその訳読」、「英語訓読及翻譯に対する諸家の意見（辰巳小次郎氏の訓読法／岡倉由三郎氏の訳解意見／坪内博士の訓読意見／故外山博士の翻譯意見）」を中心に、近代日本の英語教

育における諸言説から、「訳」という視点で問題化を試みたい。

最も興味深いのは、用語の錯綜だ。「直訳」か「意訳」かという二項対立は、得てしてかみ合わない不毛な議論に陥るのが通例だが、それに加えて、あるいはその背景には、「講読」「解釈」「翻訳」「訳解」「訳読」「英文和訳」「英文訓読」「直読直解」などの用語が、十人十色に使用されている状況がある。本誌からは離れるが、たとえば山城むつみ(二〇〇九、一八九頁)は、漢文についての「訓読というプログラム」を一種の「訳読」と説明するなかで、英語学習も引き合いに出してこう述べている。

常識的には、それ〔引用者註：訓読〕は漢文を国語の文法に当てはめて読むこと、一種の訳読とされている。しかし、これについては素朴な疑問が生じる。なぜ、何のためにこのような奇怪な読み方をする必要があったのか。少なくとも外国語の学習として見るとき、訓読は極めて不自然な学習法に見える。たとえば、英語の学習において我々はこうした便法をとらない。むしろ、これを有害として退ける。後ろから返り読みする変則的な読み方は、英語をその語順どおりに読んで理解するという正常な読解の妨げになるからである。

山城の論点は、漢文訓読の目的が中国語を日本語として「読む」ためのものであるという常識を覆し、訓読とは日本語を「書くためのプログラム」であるとする独創的な方向へと展開する。だが、ここで注目しておきたいのはその点ではなく、そもそも「訳読」という語の捉え方である。本稿では、この「訳読」とその関連用語を中心に、英語教育における翻訳の問題系を読み解いていく。

特集号の巻頭に「増刊発行の辞」として置かれた「解釈と翻訳」では、英語研究の目的は「理解と運用」とされ、さらに理解とは「解釈」であるとして、この「解釈」を「聴取」と「講読」「訳解」に分類する。そして、「解釈」が個人的なものであるのに対し、「正解した物を公衆に頒たう」とすると茲に翻訳が必要となる」と述べるのである。ところで、「英語教育叢書」シリーズの一冊として『訳読と翻訳』を著した澤村寅二郎は、「訳読」と「翻訳」を区別するために「解釈(interpretation)」を媒介項として、次のように論じている(澤村、一九三五、一頁)。

普通我国に於て訳読と称してゐるのは、広義の translation であるけれども、厳密に云へば寧ろ *construing* に当る。*construing* とは、例へば英国の学生がラテン語を読み解く時に行ふ方法であつて、P.O.D.はその意味を“construe” = translate or paraphrase so as to make the grammatical construction clear と説明してゐるのを見ても、それが丁度我々の訳読に相当することがわかる。勿論訳読も翻訳も、これを英語教授或は学習の上から見れば、解釈(interpretation)の一方法といふことが出来る。解釈は日本語であれ英語であれ、原語の意味を説明することである。しかし訳読は純粹に解釈の一方法たることをその役目とするに反し、翻訳は本来その自身の目的を有し、解釈の方法としては第二義的の目的を果たすわけで、英語英文学の研究に間接の働きをなすものである。

澤村は、日本語の「訳読」は広義の translation ではあるが、厳密には *construing* であるとし

ている。「訳読」が translation というよりも *construing* であるという指摘は一考に値するが、英国におけるラテン語の学習に用いられた Grammar-Translation Method「文法訳読式教授法」を日本の「訳読」と同一視する誤解が明らかである。この教授法は、西洋諸国におけるラテン語やギリシア語など古典語学習、さらにその教授法が現代外国語教育に応用されたものであるが、「学習中の構文を例示する人工的に作られた繋がりのない一連の文章を訳すことで、文法と構文の規則についての指導と試験」を実施し、「脱コンテキスト化された奇妙な文章」を用いるのが特色である(マンデイ、二〇〇九、一〇～一一頁)。そのような側面もないわけではないが、日本の英語教育における「訳読」の場合には、テキスト全体を対象とすることも多いので、脱コンテキストされた短文を訳出するのみではないのだが、このような誤解は現在に至っても消失していないように思われる。

「翻譯の苦心」の筆者、小日向定次郎(一八七三～一九五六)は、当時広島高等師範学校教授。東京大学英文科で小泉八雲の指導を受けた経緯から、『小泉八雲書簡集』を刊行し、他にも『英文学史』『近世英文学史』『英文教育論』『英文学の教養と英語教育』などの著作がある。冒頭で「翻譯と言ふことに就ては一勿論英文和訳の意味ですが…」と述べており、「翻譯」を「英文和訳」で言い換えている。「英文和訳」という語を英語にすれば English-Japanese translation あるいは translation from English into Japanese (『新和英大辞典』『プログレッシブ和英中辞典』参照)などとするしかないだろう。いずれにせよ translation が含まれることになるのであろうが、日本語における「英文和訳」には特別なニュアンスも加わっている。たとえば、「まずは英文和訳と翻譯とは根本的に違うというところから始めなくては」(安西・井上・小林編、二〇〇五)というような翻譯教育者の発言はごく普通に耳にする。ところが、小日向は「英文和訳」と「翻譯」の区別をすることなく、「直訳の弊」を論じて、「後戻りに文字を拾って、読まない様な癖をつける為に、いろいろ工夫して、頭から読み下して行くやうな訳」の具体例を挙げて説明する。「直訳」を抜け出すために、「頭から読み下す」という方法を取り入れるのである。

「訳読と翻譯」は、早稲田大学講師の職にあった菅野徳助(生年は不詳だが、没年は一九一五年)の談話筆記である。菅野は英語教授法の問題に言及し、「訳読教授法が迫害を受けて居る」と述べている。日本における英語教育史において、パーマー(Harold E. Palmer、一九二二年に来日)の主張する音声中心の教授法が注目される以前において、「訳読」への風当たりが感じられる。ただし、「外国語を学ぶに当ては、或る程度迄邦語の媒介を藉る方が捷徑で利益が多い」とし、「訳解も他の方法と相俟つて最も有効な外国語研究の仕方」と述べており、英語教育における母語の使用と「訳解」が混同されている。さらに「訳読」は、「一時の方便」「手引き」「媒介」として、最終的には「直接に英語に親しみ、之に習熟する」ことを説くに至る。

る。

当時も俗に「英書を読むは易いが会話作文は六しい」と言われていたようだ。しかし菅野は、学生の読みが粗雑であることを「豪傑訳」ならぬ「豪傑読み」、つまり「和訳字書の訳字を無意義に排列して直訳したり、助働詞や接続語の意義を無視する所謂豪傑読み」として批判する。ここでは「直訳」も批判の対象となっているが、菅野は別のところでも、「直訳」への批判に言及している。明治後期から大正期にかけて刊行されていた三省堂の『青年英文学叢書』(Juvenile English Literature)のシリーズにおいて、菅野は奈倉次郎と共訳をしているが、「叢書序」に訳註者識として以下のように記し、「直訳」の弊害と「意識」の問題点を指摘した上で、「原文の成句成文を単位」とした訳出方針を説明する。

直訳なるもの及び之れと密接の関係ある不完全なる和訳英字書の訳語を其儘に用うるの弊害世に知られて、英学界の呪詛となりたれども、単に代名詞、助動詞等の訳し振りを變じたるのみにして、種々の事情より此弊未だ一掃せられず、此形式的訳法は原文の意義を發揮するに於て甚だ不完全のみならず、諸子一度此習癖に染まば修学上の害測り知るべからざるものあらん。又之れと全く反対の自由なる意識法は、単に訳文として見る時は兎に角、諸子が修学の助けとして遺憾甚だ多し。著者等は原文の成句成文を単位として其意義を十分に訳出し、邦語の語法の許す限りは原文の一語をも忽かせにせざらんことを努め、且つ訳文中に屢々原文を挿入して訳文との関係を示し、又其挿入の原文は直ちに和文英訳の参考たらんことに意を用ゐたり。蓋し是れ至難の業、茲には著者等の意のある所を一言し、如何に之れに成功したるかは諸子の判断に委せんとす。

このシリーズにおける「翻訳」は一種独特のものであり、対訳の体裁で英語学習者向けとなっているので、実際の例として、『アーサー王物語』の冒頭部分を引用しておこう。

It was in the old days of England, when instead of one King, there were many, who divided the country between them, and constantly made war upon each other, to increase their possessions.

(訳)之れは英吉利の昔しの話(it was in the old days of England)、国に一王の今とは違ひ(when instead of one king)国土を分つ数多の君々あつて(there were many, who divided the country between them)、己が領地を拓めやうと(to increase their possessions)干戈を交えぬ日はなかつた(constantly made war upon each other)。

(『アーサー王物語』「ゲーレスとリネットの巻」より)

英文の意味の区切りごとに日本語訳を施しており、基本は返り読みをしない、いわゆる「順送りの訳」となっている。ただし上の例で、「己が領地を拓めやうと(to increase their

possessions)」という不定詞句は、語順を転倒させて訳し上げている。この部分には改良の余地もあるだろう。続く「干戈を交えぬ日はなかつた(constantly made war upon each other)」と順番を入れ替えて、原文通りの語順で、「干戈を交えぬ日はなく(constantly made war upon each other)己が領地を拡張やうとしていた(to increase their possessions)」とすることもできる。

澤村の前掲書では「訳読」の変遷を辿る箇所で、村田祐治の直読直解主義と浦口文治のグループ・メソッドに言及し、浦口の極端な手法は「翻譯としては日本語を murder したもの」と非難している。だが、菅野に対しては「最も合理的な一種の group method」として一定の評価を示している。澤村によれば、菅野が青年英文学叢書や Othello に応用した方法は、「英語の phrase や clause を単位として、それに適確にして純粋な日本語を当嵌めながら、全体としても朗々として誦すべき日本語を造り上げるやり方」(澤村、一九三五、七頁)なのである。

菅野が試みた方法は、英語の語順と日本語としての自然さのバランスという点で、同時通訳者が口頭で行う「サイト・トランスレーション(sight translation)」⁵に酷似する。サイト・トランスレーションとは、通訳者が原稿を「見ながら(at sight)」訳出する手法で、同時通訳方式の変種でもある。「視訳」と訳されることもあるが、通常は「サイトラ」と略して呼ばれることが多い。英語と日本語のような距離のある言語間のサイトラでは、起点言語の語順から受ける制約に対処するために、とりわけ工夫が必要となる。この点は「翻譯」と「訳読」の差異を考える場合の手がかりとなるかもしれない。というのも、サイト・トランスレーションには口頭での訳出という要素が含まれるからだ。教室における「訳読」は、英語の教科書などを基本的に口頭で訳す作業となるので、同時通訳者と同様に語順への配慮を要するからである。この点でサイト・トランスレーションは、返り読みを定式化する伝統的な「英文訓読」とは根本的に異なる。

岡倉天心の弟である岡倉由三郎(一八六八～一九三六)は、著名な英語教育者である。当時、教員養成において中心的役割を果たしていた東京高等師範学校(現・筑波大学)教授の職にあったため、日本全国の英語教育界への影響力は多大であったと言える。一九〇一(明治三十四)年から〇五(明治三十八)年にかけて英国とドイツに留学しており、帰国翌年(明治三十九年)には『外国語最新教授法』を刊行した。これは、欧州のダイレクト・メソッドを具体的に説明した本の抄訳であり、「訳読」中心であった日本の英語教育界に新しい教授法を紹介したとされる(伊村、二〇〇三)。岡倉は「翻譯と文法形式」において、「翻譯」を Art とし、美術品や書家の達筆と同じものだとする。したがって、英語教育という場では、「一字一句」でも誤訳がないことを重視するのである。この点は、本誌の「岡倉由三郎氏の訳解意見」(出典は「外国語教授新論」『教育時論』一八九四)においても基本的に同じである。ここでは「原文の真趣を成るべく解釈するの道」を説き、「語」「語句」「文章」としての「訳解」について述べている。また英文の返り読みに対しては、「聞き取るの力を失ふ」として批判している。岡倉は別の論考(「返り読」『英語教育』博文館、一九一一)においても、返り読みは漢文訓読を踏襲した悪癖であるとして、次のような例文を挙げながら説明を加えている(川澄編、一九七八、一〇〇一頁)。

I was just going to send for him when the doctor made his appearance.

(返り読) 医師の見た時には、私は丁度其人を迎ひに遣らうとして居た処だ。

(直読直解) 折角迎ひに遣らうとしたら医師が来た。

ここで岡倉は、「返り読」ではなく「直読直解」を推奨する。本誌の村田祐治による「翻訳と直読直解」にも、「訳は第二とし、先づ原文の意味を迅速に了解せしめることを方針として居る。即ち直読直解と云ふ方法を取つて居る」とあるように、「直読直解」においては、英語の語順のままにまず「解釈」することに主眼が置かれるのである。

一八六五(慶応元)年に備前(岡山)に生まれた岸本能武太は、同志社英学校(現・同志社大学)を卒業後、ハーバード大学に留学経験をもつ社会学者、宗教学者、さらに宗教社会学の草分け的人物として知られる(一九二八年没)。岸本はキリスト教社会主義者で、片山潜らとともに社会主義研究会の会員であった。本誌執筆時には早稲田大学講師だが、通常の英語教師とは異なる立場からの「訳読」に関する言説として貴重である。岸本は「訳読時代の反動」として、実用的な英語が重要視される傾向に疑問を呈して、「読書力の養成」を主張するのだが、中等英語教育の目的は、英語を「訳読」することではなく「理解」することにあると言う。つまり、「訳読は一時的のもので、早晚不用になる可き筈のもの」とするのである。しかしながら、英語のみで英語を教えることには反対し、「日本語を用ひ説明する方が確かに早道で効果が多い」として、「訳読を用ひて教える方が学生の進歩は非常に速い」とも指摘している。「直訳」に対しては「人心の自然の要求」であるとして理解を示し、全面的に否定するのではなく、ある種の必要悪という立場をとる。

巻尾に掲載された「英語訓読及翻譯に対する緒家の意見」では、四名の「心ある識者」として「故外山博士、坪内博士、岡倉教授、辰巳小二郎氏」の見解を紹介している。「明治の初年に横行したる杜撰極る直訳独案内」を問題視しているが、「訳読の進歩」という点にも注目しており、「直訳」批判一辺倒ではない。

辰巳について本誌では「小二郎」と表記しているが、正しくは「小次郎」である。辰巳小次郎(一八五九～一九二九)は藩立英語学校や東京英語学校で英語を学び、東京大学卒業後に東大予備門教師となった人物であり、三宅雪嶺や志賀重昂らと政教社を結成している。また、一八八七年に『学海之指針』誌上に「駁言文一致論」を発表しており、チェンバレンの言文一致論に駁論している。この論稿を山本正秀は、「ゆたかな教養に基づいて、かなりの進歩性をも示しつつ言文一致について周到に論じているのはさすがである」と評価し、「言語と文章との一般的相違・共通語と方言の問題・西洋の言文一致の実態・時間と話語・文章との関係、開化と言語・文章など、言文一致についての重要な問題がほとんど取り上げられている」としている。辰巳のこの言文一致反対論に対しては、四か月後に山田美妙が「言文一致論概略」という言文一致擁護論で応戦している(山本、一九六五、六六二～六六五頁)。

英語を訓読するという辰巳の主張は、辰巳小次郎編『訓点英語読本』(一八九一、同労舎)

の「緒言」と「訳解の凡例」が出典である。本書は「第一」「第二」からなる二巻本であり、書名に「附文法心得、註解、字引」という文言が添えられている。辰巳の緒言によると、「英文に就き、名詞にはテニヲハを施し、イヂオムには意識を加へ、相隔れる句には前後の次第に由て読むの方法を示せり。世間此類の書至て少し。余模範とする所乏しきに苦めり」としており、類書とは異なる独自の「訳読」方法として「訓読英語」を試みていることが明示的に述べられている。つまり、「怪しき訳解」への批判であり、従来の「英人が先に述べたる意を後にし、後に述べたる意を先にす顛倒も亦甚し」という返り読み式で英語を訓読することを善しとはしない。辰巳の訓読方式は「正則的語学の進歩を助成せんと欲する」ものなのである。たとえば凡例(三)にあるように、it is true that...は、「実に」と文修飾の副詞として先出して訳出する操作などが、従来の「変則的」な「訓読」とは異なる特色である。

坪内博士は、もちろん坪内逍遙(本名は雄蔵、一八五九～一九三五)を指す。原典で紹介されている部分は、坪内雄蔵「英文学教授者の心得」『英詩文評釈』(一九〇二年六月)が出典である(川澄編、一九七八、九九七～九九九頁)。後にシイクスピア全集の初邦訳という偉業を成し遂げた翻訳者が、当時の「訳読」について述べた意見である。「従来の不妥拙陋なる直訳法」は「薩摩字書」以来の辞書類の訳語の不備にも一因するとし、また、英語と日本語の代名詞の差異にも触れ、英語の代名詞の日本語への「直訳」によって訳文が冗長となることを指摘する。

この坪内とは対照的に、「直訳」擁護を表明するのが、次に掲載された意見である。故外山博士とは、外山正一(一八四八～一九〇〇)のことであり、ここでの出典は『英語教授法』(一八九七、大日本図書)である。外山は蕃書調所で英語を学び、英国と米国への留学経験を持ち、帰国後は東京大学において日本人初の教授に就任した人物である。外山は、通常「直訳」とされているものは、「真の直訳」ではないと言う。それは「一種化物(バケモノ)的の訳法」「怪訳」「誤訳」「愚訳」であるとする。そして「意識」とは、「原文の妙味にも構はず、唯々、原文の意味を訳出するの趣向なり故に極めて容易の訳法」であるとして、首肯しない。ほぼ同時代の同様の主張は、高橋五郎『英文訳解法』(一九〇八)などにおいても見られる。ただし、彼らの推奨する「直訳」は、坪内逍遙に代表される「直訳」反対派の「直訳」と同一ではないのだが、むしろ、英文学者と英語教育者との間にこのような対照的な意見があったこと、そのものが注目すべき点であろう。

以上、本稿では『英語世界』の「解釋と翻譯」特集号から、明治末期の英語教育における「訳」をめぐる言説の錯綜を中心にまとめてみた。今後は、このような言説を「翻訳論」として編成し直す可能性も探りたいと考えている。

.....

【著者紹介】

長沼美香子 (NAGANUMA Mikako) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。日本通訳翻訳学会理事。

.....

【註】

1. 原則として、旧漢字は新字体に改め、変体仮名や合字は通常の字体にした。ただし、固有名の一部、「翻」「翻」の区別などには配慮している。
2. 目次と本文中のタイトルが異なる場合、各論考の収録には後者を採用した。たとえば、菅野徳助「訳読と翻訳に就て」→「訳読と翻訳」、岸本能武太「英語の理解と其訳読」→「英語の理解とその訳読」、「訳読に対する諸家の意見」→「英語訓読及翻訳に対する緒家の意見」となっている。
3. じつは『英語世界』という誌名の雑誌は複数刊行されており、少なくとも三種類ある(藤井、一九八二/一九三三)。発行年の古い順に、(Ⅰ)一八九七(明治三十)年～一九〇五(明治三十八)年、英語世界社、(Ⅱ)一九〇七(明治四十)年～一九一八(大正七)年、博文館、(Ⅲ)一九五〇(昭和二十五年)～一九六三(昭和三十八年)、研究社出版、以上の三種類である。本稿で紹介するのは、(Ⅱ)博文館発行の月刊誌『英語世界』の春期増刊号。
4. 創刊号の巻頭に置かれた「発刊の辞」は、THE BIRTH OF THE ENGLISH WORLD 「英語世界生る」のタイトルに続いて、英日の二か国語で併記されている。署名はなく、筆者不明。
5. 通訳者の行うサイト・トランスレーションは、「サイト・インタープリティング (sight interpreting)」とした方が正確かもしれないという指摘もある(ポエヒハッカー、二〇〇八、一七頁)。

【参考文献】

安西徹雄・井上健・小林章夫編 (2005) 『翻訳を学ぶ人のために』 世界思想社
藤井啓一編 (1982/1933) 『日本英語雑誌史』 名著普及会
伊村元道 (2003) 『日本の英語教育 200 年』 大修館書店
川澄哲夫編 (1978) 『資料日本英学史 2 英語教育論争史』 大修館書店
ジェレミー・マンデイ (2009) 『翻訳学入門』 みすず書。
フランツ・ポエヒハッカー (2008) 『通訳学入門』 みすず書房
澤村寅二郎 (1935) 『訳読と翻訳』 研究社
菅野徳助・奈倉次郎訳 (1907) 『アーサー王物語』 三省堂
高橋五郎 (1908) 『英文訳解法』 同文館
辰巳小次郎編 (1891) 『訓点英語読本』 同労舎
外山正一 (1897) 『英語教授法』 大日本図書
山城むつみ (2009) 『文学のプログラム』 講談社文芸文庫
山本正秀 (1965) 『近代文体発生の史的研究』 岩波書店